

始良市特産品協会 会員インタビュー

紅窯 様



“「楽しい」「おもしろい」だから続けられる”

そう語るのは“たたら作り”の陶器を製造・販売している“紅窯”の川原秀子さん。代々の窯元くれないがまというわけではなく、ご主人の川原義昭さんが趣味ではじめた陶芸がきっかけなのだそう。本日は陶芸の面白さに魅せられたご夫婦“紅窯”の川原秀子さんにお話をうかがってきました。

——ご主人の川原義昭さんは、代々の窯元ではなかったとお聞きしましたが、なぜ陶芸をはじめることになったのでしょうか。

主人が40歳の頃だったと思います。今まで続けていた仕事を辞めて、次の仕事を始めるまでの充電期間にカリフォルニアを旅行し、陶磁器村というところに行ったことがきっかけでした。

その陶磁器村が本当に素敵なところで、そこにあった陶器を見た主人が「土さえ買えば、窯もあるし自分でも作ってみようかな」と思ったのがはじまりです。充電期間中の遊びみたいな感じでした。

窯は主人の姉が持っていました。姉も仲間たちと陶器を作るために所有していたようです。主人は姉が作っているときには全然興味がなかったようで、陶芸をやったことなんてありませんでした。

姉が結婚して、陶芸をしなくなり、窯も使わなくなってしばらくたった頃、私たち夫婦がカリフォルニアで陶器に出会ったのはそんな頃でした。さいわいなことに姉が持っていた窯は、たまに知り合いの方が使用していたので、使用する際にある程度メンテナンスしてくれていました。

旅行から帰ってさっそく自分で陶器を焼いてみました。どこかに習いに行くわけでもなく、独学で焼いたのですが、そのときに主人はこう言ったんです「これはおもしろい！」と。

——最初は趣味のような形ではじめられたのですね。では、それを仕事にされたのはいつだったのでしょうか。

旅行で陶器に出会ったのが1989年でした。仕事にしたのは2年後の1991年です。

主人は一度のめりこむととまらなくなるタイプでして、おもしろいと思ってからは、いろんな本を読んだり、他の工房に行って聞きにいったりしていました。普通だったらどこかの先生のところに行って、教えてもらうのでしょうか、そういったことはせずいろいろな失敗を繰り返しながら独学でやっていきました。



そんな失敗を繰り返しながら1年くらい経った頃に、「これはおもしろいから、仕事にしよう」と言ったんです。これを言い出した頃は仕事を辞めてから1年以上経っていたし、次の仕事は何にしようと考えていた時期でした。正直稼ぎにはならないだろうと思っていましたし、私も儲かるとは思っていませんでした。「もう新車は買えなくなるよ！」と言ったり、周りからも心配の声をたくさんいただきました。それでも本人が、「苦勞してしまうかもしれないけど、これはおもしろいから仕事にしたい」と決断したことだったので、私も応援することにしました。「おもしろくなくなった時は辞めようね」なんて笑いながら言っていたのですが、30年近く経った今でもおもしろいと思って続けています。

—お店の商品はどれも特徴的な形で、お魚の絵が入っていますね。これはご主人のこだわりなのでしょうか。



特徴的な形になるのは“たたら作り”という技法の特徴です。ろくろもありますが、うちではほとんどの作品を“たたら作り”で作っていて、ろくろはあまり使いません。

たたら作りは、砲丸のような型に薄く切り出した土の板をかぶせて作ります。ろくろは遠心力を使って形や厚さを均一にしていますが、たたら作りにおいては、土を被せて作るので、縦にしわができるし、自分で形を整えて、厚さを変えていきます。ですので、

同じような形のものはありません。全部違った形になります。しかも若干ですがいびつな形になります。ただ主人はそのいびつな形に絵付けをするのが楽しいみたいです。

姉はろくろがすごく上手で、綺麗な形の作品をつくっていたのですが、姉に頼んでそういった作品を作ってもらい、それに絵付けをしたときの主人の絵は、しっくりこなかったようです。

また、足を後づけでつくるのもたたら作りの特徴です。後からつけるということで、手間もかかるし、形はいびつだし、時間もかかります。でもそれが楽しくてやっています。自分が楽しむこと、おもしろいと思うことを第一に作っていますので、“紅窯”はこの作り方なんです。

お魚の絵は主人の趣味です（笑）。主人は魚釣りが好きで、お魚も大好きなものですから、絵付けにつける絵も自然とお魚を描くようになっていました。

—陶器作りを本当に楽しんでおられるんですね。

そうなんです。主人が楽しんで始めたことですが、私もおもしろくなって一緒に作っています。土もいろんな土があっておもしろいですよ。いろんな種類の土はそれぞれに特徴があり、さらに釉薬との相性も違うし、窯から出すたびにいろんな発見ができることも楽しいんです。この土も1種類で作るわけではなく、いくつかの土を混ぜ合わせて作ります。土を混ぜ合わせる作業はかなり重労働で大変です。土はとても重いので。

他の窯元さんでは使う土を決め込む場合が多いです。土と釉薬の相性があるので、うまくいかないと割れてしまいます。たくさんある土と釉薬の組み合わせを一回一回試すのは大変ですし、正直めんどくさくて気に入った土や釉薬をずっと使うことが多いです。うちではそういった組み合わせを試すこともやっぱり楽しいので、今でも土を決め込まずに楽しんで色々な土や釉薬を試しています。新しい土が入るとすぐ試したくなっちゃいますよ（笑）。

色を出すのもすごく大変です。例えばひと口に“青色”と言っても何十種類もあります。焼物は塗った時と焼いた後で色が変わる上に、たくさんの種類を混ぜ合わせて色を作ります。自分が思ったとおりの色になかなかありません。焼加減によっても色が変わってしまうし、時には焼け焦げてしまうこともあります（笑）。たくさんの違う種類の“青色”を使って作り上げたはずなのに、焼き上げて窯から出してみると、全部同じ“青色”に見えてしまうこともあります。それだけ焼物の色を出すことは難しいです。



“紅窯”の名前の由来も、厳密には“紅”ではないのですが、“紅”に近い“とある色”があるんです。主人はその色を出したくて、その色が出てくれるように願いをこめて“紅窯”という名前でお店を始めることにしたのです。

重労働でも、思ったとおりの色にならなくても、土の違いや色の違いを窯から出すたびに発見できて、ほんとうにおもしろいんです。これで食べているので、あまりこう言うべきではないかもしれませんが、おもしろいからやっています。楽しくなくなったら辞めます。

どんな仕事だって大変かもしれないけれど、今のこの仕事は楽しいと思えることがある分、他の仕事よりもいいかなって思って続けています。

——これまでにあった、うれしかったエピソードなどがあれば教えてください。

うちの商品は基本的にここに買いに来ていただくか、ドルフィンポートやエアポートギャラリーに不定期に置いてあります。そうすると県外の方がよく買ってくれるみたいで、たまに電話がかかってきます。「どこか他でも買えないですか？」って。うちは機械が苦手インターネットもFAXもないものですから、申し訳ないですけどってお断りさせていただくと、鹿児島に来たときに買いますって言ってくれます。そういったお声はうれしいです。

また、この間は「東京の日本橋の料亭で紅窯の商品が使われていたよ」って、写真つきで送られてきました。これもうれしかったです。経緯を聞いてみると、その料亭のオーナーさんがエアポートギャラリーで大量に買っていったことがあったみたいで、うちの商品を友達にあげたり、いろんなところに配ったり、自分の店で使っていたりしたみたいです。

うちの商品はすごくユニークな絵が入っていて、どこに出してもひと目で分っちゃう物ですけど、私たちはひっそりとお店をやっているんで、ここで買ってくれたり、エアポートギャラリーやドルフィンポートで買った商品がそういったところにめぐりめぐって置かれているのはうれしいですね。

ただ、みなさんが気に入ってくださるその特徴的なお魚の絵は、主人しか描けないんです。だから主人には長生きしてねっていつも言ってますよ（笑）私は絶対描かないし。主人が楽しくやっている間だ

けですね。この商売ができるのは。

——それでは、逆に大変だったエピソードなどはありますか。

ドルフィンポートの薩摩工芸館へは不定期で展示をさせていただいています。常設展示になっている期間は、結構人気が出ていて、在庫が切れることも良くあります。業者は一度にたくさん

(100個単位で)買って行くのに、こちらではそんなにたくさん作れていなくて、在庫がない場合もたくさんあります。そういったときは商品作りに追われるので大変です。

でも、そういったときに作業をすると、絵付けの際の魚の顔も変わってきます。楽しむ余裕もなく、作業に追われるかたちで作られた場合には、絵付けした魚の顔も元気がなくなります。手で作るものはみんなそうです。人形作家の先生や書道の先生も同じことを言います。

手から生み出されるものは本当に気をつけないと、体調や気持ち全部が作品に現れます。絵はもちろんですが、形にも出ます。イベントにも追われず、のびのびとした環境で、楽しみながら作ったときの作品は、やっぱり出来がいいです。絵付けした魚の顔も、すごくいい顔になります。

私たち夫婦の作品製造のコンセプトですが、食卓が楽しくなるような、そんな生活食器としての器作りを心掛けています。ですので、やっぱり楽しみながらやるのが大事です。楽しくなくなったら作る商品も食卓が楽しくなるようなものにはなりません。楽しくなくなったらやっぱり辞めると思います。

——【インタビューを終えて】

インタビューの中でもあったように、敷地内のギャラリーにあるたくさんの作品それぞれに描かれているお魚の表情は、どこかにこやかな表情をしているように感じられる。

話の節々に、「おもしろい」「楽しい」という言葉を使って話す秀子さんは、インタビューの間は常に最高の笑顔で、本当に仕事を楽しんでいるのだと伝わってきました。

「主人は恥ずかしがり屋で、取材とかそういったものは受けません。でも私はお客さんとお話したりするのも好きなので、代わりに私が何でもお答えしますよ。」と言って、ご主人のことも楽しそうに語る秀子さん。ご主人のことを語る時の表情もまた、とても明るいものでした。

「自分たちが楽しむことが大事。そうしてできた作品で、お客様にも楽しい食卓にして欲しい。」川原さん夫婦はご自身が楽しむことを大事にしつつも、その楽しい気持ちがいろいろな家庭に伝わることを願いながら、商品を作り続けている。みなさま、重富中学校近くの住宅地にひっそりと店を構え、たくさんのお魚が楽しげな表情で泳ぐギャラリー“紅窯”にぜひ一度足をお運びいただければと思います。



【お問い合わせ】

紅窯

〒899-5653 始良市池島町 5 番 13

電話 : 0995-65-6326

携帯 : 080-4283-9071^{くれない}

川原義昭・秀子

取材者・文責

〒899-5492 始良市宮島町 25

始良市役所 商工観光課 企業商工係

電話 : 0995-66-3145

始良市特産品協会インタビューURL

https://www.city.aira.lg.jp/shosin/tokusannhin_interview.html

